
リンと鬼

すすす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンと鬼

【Nコード】

N6414V

【作者名】

すすす

【あらすじ】

鬼の供物になった少女たち。その中の一人、リンは、鬼の村から脱出しようとしています。すみません。タイトル含め改稿が多いですテスト。流れは変わってません。はず。

1じく：鬼たちにさらわれてしまったのです

ある日、わたくしたちは、鬼たちにさらわれてしまったのです。

私たちの住む村は、山奥の寒村でした。

土地は貧しくて、皆は食べていくのが精一杯。老人や子供は何人も養えませんでした。

その上、この辺り一帯は鬼の村の「縄張り」で、鬼たちは数百年に一度、縄張りの村々から娘数人と食料を望むのです。

しかしそれ自体は、悪いことはありません。

なぜなら村々は、娘と食料を渡す代わりに、鬼の縄張りに住めて、つまり他の妖怪や盗賊から襲われる心配は、ほぼないのです。

いふなれば私たちは、鬼へのお供え物なので、冒頭の「さらわれた」というのは語弊がごさいます。

しかし日時も食料も娘の指定も、全てが急なことで、家族への挨拶もそこそこ。

お昼を少し過ぎた頃、私たちは各村長むいおやたちに案内されて、村から離れた見知らぬ場所に集まったのでした。

その場所は、少しひらけただけの荒れ地で、目立つ物と言えば大きな杉の木が二本。これは鬼との待ち合わせの目印でしょうか。

まわりを見渡せば、いくつかの仰々しい輿こしが、村の簡素な暮らし

と相対して、却って不吉な予感をさせます。

最終的に集まった少女の数は二十人前後でした。

近くの村々から集まった、知った顔や知らぬ顔です。

女三人寄れば、かましい。などと言いますが、さすがにそんな雰囲気ではないのか、少女たちの表情は、悲しんでいたり、諦めたり、不機嫌だったり、まわりを窺ったり、様々とはいえ、大変静かなものでした。

少女たちの格好も実に様々で、綺麗に飾られた娘もいれば、清潔に身なりを整えただけの娘もいます。かくいう私の服装も普段着とほぼ変わらない、さっぱりしたものでした。

鬱々とした雰囲気も何なんで、私は近くの数人と交流を試み、話し相手の緊張が少し和らいだかもしれなかった頃。

私たちをここまで連れてきた、村の衆たちも帰り、日も沈み始めた頃。

青い薄闇の中、鬼たちは急に現れたのです。

「……………」

私たちは思わず、身をすくませました。

鬼の身の丈は、人の二倍三倍。頭からは、鹿とも牛ともとれる、白黒、茶色、まだら、様々なツノを生やしています。

たてがみは枯れ草のようで、耳まで裂けた醜悪な口は、恐ろしげな牙を、上から下から生やしています。

着物や毛皮、武器を雑に身につけ、山賊の方がよっぽど気の利いた格好をしてるでしょう。こわい。

「……！」

いたいけな少女たちが悲鳴を上げる間もなく、鬼たちは、食料を乗せた輿こしや少女たちを、さっさとかつぎました。

「……！？」

食われる。（食的に）

などと危惧した少女たちですが、鬼たちは、諸々のお供え物を、良い塩梅あんばいにかつぎ、どうやら移動をはじめのようです。

鬼たちは、大漁大漁とでも言うかのように、少女や食料を持ち上げ、薄暗い獣道を歩いて行きました。

「……。」

鬼の肩の、前に後ろに、適当にかつがれた私たち。

その鬼たちの体は、大きさからして人間と違うので、走っているのか歩いているのか、それこそ魍魎じようりやうに化かされたかのように、まわりの景色は流れてゆきます。

不思議なものです。

鬼たちは、えっさえつさと、少女含めた「荷物」を運び、あまり私語は聞こえません。

むしろ、少女たちのすすり泣きが聞こえます。

しくしく… くすん くすん…

そうだよ、こわいよね。産まれ育った村ともお別れだし。私も鬼は怖いんです。しかし。回りを流れる景色の、何て不思議な

こと。いつもより高い目線の、何とおもしろいこと。
何という事でしょう。これは目が離せません。

でも、他の少女たちが泣いているのに、こんな時に楽しがるなんて不謹慎です。もしかしたら、高い所が凄く苦手な人もいるのかもしれない。そうそう、昔からなんとかと煙は高い所が好きって…。私が無口に運ばれていると、

「リ、リンさぁん…」

私の名前を呼ぶ涙声。

私（をかつぐ鹿角の鬼）の前を歩く（牛角の鬼にかつがれている）少女の声です。

さつき知り合いになった、私より、ふたつ年下の少女です。
いうなれば、まだ親も恋しい年頃でしょうに。あらあら。泣かないで、大丈夫よ。私は少女に声をかけます。

「だいじょうぶ。 たぶん鬼の村まで運ばれているだけだから。」

まあ見たままを言ってるだけなのですが。先のことを考えると、実はなにも大丈夫ではないのですが。中身はなくとも、声かけは大事なのです。

「だいじょぶよ。」

私は少女に笑いかけます。
根拠のない笑顔なのですが、人間ふしぎと、仲良くなった相手の表情につられる物なのです。

少女は、すこし落ち着きを取り戻しました。
手を伸ばして、

「わぁん、リンさん。手を繋いでください。」
「それはちょっと…、さすがに手がとどかないよ…。」

私たちは、お互いに手を伸ばしましたが、いまいち、届きませんでした。

「くっ、リンさん…！」
「よいしょっっ」

—— 某時。 某倉庫。

「^{しかづの}鹿角。お前が運んでた人間たちは、妙にきやつきやしてたな。」
「そうだな。それソコ^{おれ}の場所な。」

「おお。吾^{おれ}が運んだ人間は気が強くて、顔を蹴^おられたよ。」

「蹴られる位ならまだいいよ。
吾なんか泣きわめかれたよ。一人が泣いたら、五人、十人と広が
って…。」

混沌とするわ、いたたまれないわ…もう…。」

「…。」
「…。」
「…。」
「…。」

「まあ…、なんだ…。」

吾うしろの方にいたから、分からなかったけど、きゃっきゃしてた人間って、どんな風だった？」

「片方はたれ目で小動物みたいなので、片方は切れ長黒目勝ち。鹿角が運んでいたほうが、黒目勝ちだな。」

「べっぴん？」

「種類は違うが両方べっぴん。」

「…。」

「甲乙つけがたいな。」

「あとは好みの問題…か…。」

鬼たちは神妙な面持ちで、倉庫の整理を続けた――。

2んじん：ここは鬼の村

ここは鬼の村。

むき出しの岩壁に、粗末な家がぽつぽつとあります。

それぞれの住処からこちらを覗く、女や子供の鬼たちの目は闇夜に光ります。

私たちの住んでいた村よりも、殺伐とした風景です。人の村から食料や女を取るのも納得するほど、何もない村でした。

女の鬼は少なくて、誰もが子を抱き、腹を重たそうにしています。その姿に、私たちは今後の自分たちを想像いたします。嗚呼とも思いますし、ため息も止めどなく流れ出ますし、きゃーとも思います。

私たちは、鬼たちの赤子やちこを産むために、この村に来たのです。

鬼が女を所望と言ったらもう、物理的に食うか、性的に食うかの二択というね。

そして鬼たちの縄張りである、この辺りの認識では、たいがい後者なのです。

しかし落ち込みすぎは、良くありません。私たちは顔を合わせ、

必ずこの村から出ると、誓い合ったのでした。

鬼の村に着いた私たちは、村の中央にある広場に集められました。そこには、こうこうとかがり火が焚かれていて、待ち受ける鬼たちと、供物を運んできた鬼たちが合流し、異形の鬼の数はますます

増えたのです。

パチパチパチ

かがり火が音を立てます。

わりかし静かな中、私たちは供物の食べ物と一緒に、どつかりと地面に降ろされました。鬼たちが私たち含めた供物を、ぐるっと取り囲みます。

どうやら、少女や品物の数を確認しているようです。

そんなかがり火の曖昧な明かりの中、私たちはこの場の恐ろしさに、身を寄せ合い震えました。

鬼達の姿はますます大きく見えて、私たちは本能的な弱肉強食を、捕食される立場というのを、感じずにはいられませんでした。

その時、一人の鬼が、地に響くような声で言い出します。

「人間は女子供の区別が付かぬ。みな痩せていて小さい。これらの人間は、もうややこをなせるのか。」

鴨がネギを背負ってきました。

さらわれてきた娘たちの年齢は、ばらばらです。しかし皆、少女と呼ばれて数年を過ごしていました。

村長が厳選して、村の衆の命と引き替えにした娘たちです。

私は鬼たちに対し、交渉に出ました。

「私たちはまだ子供。まだややや産めません。あと数年だけお待ち下さい。」

嘘です。

娘によりもう産めます。村に子供を残してきた娘もいます。
私は恐ろしさを落ち着けようと、胸に手を当てながら、もう一度、
続けます。

「どうか、あと数年だけ、お待ち下さい。」

「よかるう。人の数年など、吾ら^{われ}にとっては、まばたきも同じ。」

……鬼は深く考えることをしない性質^{たち}なのでしょうか。

私の要望を、思いのほかあつまり通すと、私たちはこのあと数年、
本当に鬼のややを産むことはなかったのです。

私たちはほつとしたり、執行猶予が延びた囚人のようになり、
様々な反応をしたのでした。

—— 某時。 某小屋。

「鬼のおややを産みたくて、この村に来たひとー!」

「うわダイレクトに聞きすぎよ。」

「ねえちよっと、まだ本当に子供もいるんだから、こう…オブラー

トに包んで……。」「

「わたし……」

おにの捧げ物になると、家族にお米が配られるって、村長さまが言うから……それで。」「

「……ッ もういい……っ！ もう、何もいわなくていいから……ッ！」

「でも、まあ……」

私も似たような物かな……。みんなもそんな感じよねえ？。」「

「……まあ。ねえ。」

「ははっ……。」「

「……」

「……」

「……」

「私はある程度、覚悟できてるかな。どうしても時は、私を差し出してもいいよ。」「

「ねえさん……！」

「はなちゃんとかに、こんなことさせられないでしょ。」「

「ねえさん…… かつこいいよ。」「

「私も……姉さんと同じく、もしもの時は差し出されてもいいかな。」「

「正直ああいうの嫌いじゃないし。」「

「まじで。」

「勇者……勇者がいらっしゃる……。」

ざわ… ざわり…

「じゃあもしかして私、邪魔した？」

「いや、リンはファインプレーだったと思うよ。」

「うん。結果論だけど、私もあの場合は『全員を守り』に入らせたほうが良かったと思うよ。」

「もう一人の、今日の勇者の称号を与えましょう。」

「いや、この流れでその称号を与えられなくても…。」

不安と度胸と困惑が入り乱れた少女たちは、さわさわとその夜を明かしたのだった――。

3しよ：ところで私たちは働き者でした

ところで私たちは働き者でした。

よく晴れた日など、百姓の血が騒ぎます。

じっとしてるのも何なんで、鬼たちの許可を得て、開墾かいこんして、田畑を耕し、糸を作り機はたを織り、着物を仕立て、とらわれの身とはいえ、私たちは、鬼の村の中で、一定の仕事を担うようになったのです。

ある日、鬼は私に言いました。

「先に言っていた数年が、過ぎた気がするが。」

「何をおっしゃいますやら。まだ一年も経っておりません。」

「何を言うか、嘘をつけ。山のアケビが三度なったわ。」

「あれは一年に五度なるのです。鬼ともあるう方が、そのようなこともご存じないのですね。」

嘘です。アケビは一年に一度です。

五度なるなんていう、おいしい仕組みのアケビがあったら、私も欲しいものです。

私は続けます。

「いえ、いえ。鬼ともあるう方が、そんなはずはございません。

きつと無知な人間が、きちんと一年を数えられるかどうか、お試しになっただけなのです。」

「……………」

鬼は私の言い分にあきれたのか、少し黙りました。

私には、鬼の表情など分かりません。

鬼の瞳は、爛々とした水色や黄色で、人間離れた瞳孔は、縦に細く小さく、むしろ点。情などひとかけらも無さそうです。

おかげで全く表情が読めませんが、相手を食った様な私の言い方に、きつと怒っているか、あきれているのでしょうか。

私はその頃になると、仲間を励まし、鬼を誤魔化し、鬼ともある程度、強気にやり取りできるようになっていました。

私たちは自然と仲間内で役割ができていました。

集団のまとめ役というのを、いとわないねえさんが数人います。

まとめ役と言っても、要するに雑用なのですが、リーダーシップを取るのに対して満更でもない人がいると、周囲の人間は、大変助かるものです。

そして私は、リーダーシップをとるねえさんたちや年下の少女をサポート、フォローする役なのでした。

この数年の中でそういう役割を、それぞれ落ち着かせていって、自分たちでいうのもなんですが、なかなかうまく回っていたと思います。

私たちはそれぞれ、その役割を、ぼんやりと必死になんとか、全うしてたのでした。

「…な。 なにか？」

しばらく黙っている鬼に、私はきょどきょどしながら聞き返します。

別にアケビの稚拙な嘘は、通じなくても良いのです。

娘たちが、ややを産むのを拒否している、というポーズが伝われば、この言い分は、意味があるのです。にらまれてるのは、すごい怖いけど。

鹿角の鬼は言いました。

「お前はおもしろい事を言うな。人はみな『子供』の内からそんなに口が達者なのか。」

ドキリ。

私の胸は危機感的な意味で、高鳴りました。

その頃の私の年齢は、十八前後。詳しい年齢は分からないのですが、たぶんそのくらいです。

もし人間の村にいたなら、それこそ、ややの一人も居たのかも知れません。

「……、……。」

私はすごく曖昧な笑顔をして、その場をそそくさと去りました。

必要な会話が済めば、さわらぬ鬼に祟りなし、なのです。

後ろから鬼が「あ」とか「おい」とか言ってる気もしますが、きつと空耳です。くわばらくわばらなのです。

さて。

その頃になると、少女の中で、個人的に鬼と微笑ましい恋を育む者が出てくるのです。

少女は可愛い世話焼きで、相手の鬼は、他の鬼よりも小柄で気が優しく、少女は次第に心（とか体）を開いたのです。

あれよという間に、懇ろになり頃合いになり、あっさりとややが産まれました。

少女と鬼は、大変むつまじく、その姿はリア充末永く爆発しろといった具合なので、私もこれ以上野暮は申しません。

ややこが産めるではないかと、せきを切ったかのように、出産ラッシュです。

私は浮き足立つ鬼たちに、数年同じ村で過ごして、鬼に対して情がわき、まんざらでもない娘たちをあてがい、

数週間で、母親からスルツと産まれるややたちの世話をして、

私は、鬼とあれするのに合意のない娘たちと共に、鬼からトリッキーに逃げまくったのです。

—— 某日。某寄り合い所。

「娘たちが、既にややをなせるとは。」

「リンは率先して、吾らを騙した事になる。」

「…まあ、それは吾ら暗黙の了解ではあつたが。」

「人の娘たちはよく働き、村の食料を増やした。謀^{たは}つた事は問うまい。」

「うむ……。」

「娘たちの織る反物は、吾らの衣服だけでなく、よそへも売りに出せる。」

これがまた馬鹿にできぬ値で。

売る時は、商談の得意な、あの娘ら数人を連れれば、よりよい具合に話がまとまる。」

「——結果オーライという事で。」

「異議はない。」

「ところで虎狩の。おぬし最近、人の娘の尻に敷かれているとか。」

「——…尻に敷かれた方が、うまく事が回るものよ。」

「…えらい遠い目ですな。」

「……。」

鬼たちは、悲喜こもごもの様相を呈したのだった——。

4 いたけ：ベビーブームもひと段落した頃

ベビーブームもひと段落した頃。

「私このまま、この村にいても良いかなって…。」

もしもじと、幸せとも諦めとも、場所に馴染んだ惰性とも見える、とある少女は、ふつと言いました。

当初の目的だった「鬼の村からの脱出」を、離脱する娘が増えたのです。

考えてみれば、鬼の生け贄となったこの身で、再び元の村に受け入れて貰えるかなど分かりません。

他の村へ行くにしても、あてはない身。

もし、再び元の村に帰れたとしても、あの静かで慎ましい暮らしは、今や懐かしい思い出です。

鬼の村も、元の村と同じように、貧しく厳しいけれど、誰の子か分からないほど子供にあふれて、賑やかで、鬼のおかみさんたちは、気づぶが良くて世話好き。

「……。」

…要するに、私たちは最低限、命の保証があれば、どこでも暮らしてゆけるのです。

ある少女は、鬼も悪いもんじゃないわよ、などと擁護する始末。

いま少女たちは、昼仕事の休憩中に、井戸端会議です。

うつらうつらとした日差しの中、お茶やお新香などをつまみます。キヨコねえさんのお漬け物おいしい。

お漬け物うめえ、と舌鼓をうっている私に、仲の良い少女が話題を振ります。

「リンも誰かを好きになれば丸くなるかも。ばんとっさ…

あの、鹿のツノの鬼なんてどう。」

「よして、私、」

私は思わず身を引いて、もうほんと遠慮しますといった感じに、手の平を振ります。

正直に言いましょう。鬼と数多く交渉した私ですが、鬼なんて基本こわい、こわいよ！ なにを今さらと言われようと、ここはもう主観の問題なので、ねえさんたちは生ぬるく私を見つめます。

立ち入った話しになりますと、私は元の村で下働きだったころ、年上の人から厳しいしつけを受けたので、自分より体の大きい人は基本的に苦手なのです。申し訳ない先入観なのですが。

「わたし、自分の背の半分くらいの、小さい相手じゃないとイヤ！」「それは犯罪じゃ…。」

…

「冗談は置いとして、」

「冗談いつ目じゃなかったわよね。」

「真面目に言つと、」

「流す気ね…。」

「私この村から出て、世界中の色んな所を見てまわるのが、昔からの夢なの。」

私の身を焦がすような告白に、親しい少女たちは聞き飽きたかのように、あきれた声で返します。

「まあ…、昔から言ってたわよね。」

「リンねえさんって時々、突拍子もない事を本気にしてるよね…。」

ええ、本当に。幼い頃に旅人から聞いた、数々の不思議な話し。その話を聞いた時から、私の胸には、密かにすでに密かでもないけど、野望があるのです。

珍しい景色、危険な場所。洗練された都。ごちゃごちゃした都。海を渡って大陸、異国。砂漠、サバンナ。ハアハア。

私もいつか、この世の色々な物を、見て歩きたい、と思っているのです。

「リン。息はあはあしてないで。」

鬼の村まで来といて、今さらあんた。まだなんか見たいの。」

「見たいわ。謎の大陸、未知の動植物！ キャッ」

「キャッ言つとこじゃないよね。」

私は恋する少女のように、両手を頬に当てて、恥じらい身をよじりました。

よいではないですか。単なる娘の、他愛もない夢なのです。

そうして、少女達の、鬼の村を出る計画は、こんなにもぬるい雰囲気
で失敗に終わったのです。

その日の夜も更けた頃。

私は自分たちの暮らす小屋を、そつと抜け出します。

外壁添いを歩いてゆき、とある茂みに身をかがめました。

土を除けて、顔を出した板をはずせば、そこには数年越しでやつ
と揃った、脱出道具一式があるので。

「……。」

私は脱出道具を、感慨深く見つめました。

ごまかしましたよね。みんなで、せこせこ集めましたよね。

道具集めが鬼にばれそうになった時もありましたよね。もう必死
にごまかしましたよね。

「……っ。」

私は自分の物だけを手に取り、他の物は、元の位置に隠しておき
ます。

あとで、他の少女が脱出したいと思ったときに、まあそんな時、
来そうにないですけど、役立つでしょう。

今夜、私がいなくなったら、村に残った少女達は、どうなるので
しょうか。

私は、少女たちに対する、鬼からのひどい追求は、無いと予想します。

多くの少女たちは鬼に対して、たいへん従順で、心情的な意味もさながら、数字的にも…つまり娘の数は足りているのです。

この数年で、病死や事故死をした娘もいました。

血の通わない考え方をすれば、私の脱走は、その娘達と同じ欠員だと考えれば、差し支えはないのです。

私は身支度を整えて、再び小屋に戻り、少女たちにお別れを言います。

少女たちは、私との別れを惜しみこそすれ、誰一人、私を引き留めませんでした。

いいのです。さびしくないのです。

この数年で築いた固いチームワークで、みんな私の性格を、私よりもよく知っているのですから。

「リンさん…。わたし…毎日泣いてた私を、リンねえさんが慰めて、なだめてくれてたから…今までこの村でやってこられたの。」

「いいのよ。はやく元気な子を産んでね。よしよし。」

「リン。私、まだあの時の、私が鬼に絡まれて骨折したとき、リンがかばってくれた時の借りを、まだ返してない。」

「いいのよ。あなたが笑って…鬼とじゃれ合えるまでね…元気になってくれたのが一番のお返しよ。」

「リンが一番早くこの村に馴染んでたのに、リンだけが村を出るとか、分らないものね。」

「うん、私も姉さんが、ああいうタイプに弱いとは思わなかったわ。分らないものね。幸せにね。」

「うつるさいわね。早く村から出ていきなさいよ。かんちがいしないでよね！」

リンがいなくても大丈夫なんだから。心配しないでよね。」

そう言いながら、ねえさんが抱きしめてくれるので、私はつい、せきを切ったかのように涙を流しました。

「うつうつ。ねえさん……！」

「リン……。そんな今生の別れじゃないんだから、そんなに泣かないで。」

「うつうつ、でも……。今生の別れになるかもしれないじゃないですか……。」

「だって、リンはきつと、またこの村に帰ってくるし……。」

「え？ それはどういう意味……」

「……。なんでもないわ。」

ねえさんは含み笑いをしながら、私の背中を軽くなでて言いました。

確かにこの村に戻る物なら、折を見て顔を出したいものですが……そういう意味でしょうか。

私はねえさんの含み笑いに、もやっとした思いを抱きながらも、みんなとの別れをしくしくと惜しんだのでした。

「リンさんてさ……世話好きっていうか、皆のおかあさん役だけど、色恋は超うぶうぶしいよね……。」

「鬼が（性的な意味で）怖いからって、数年越しで脱走するとか……。」

「まあ、（性的な）嗜好は人それぞれよね……。」

「……逃げ切れるかな。」

「……追いつかれるよね。」

「番頭さんに。」

少女たちは不吉な予言を、静かに……だが、きつぱりと呟いたのだった——。

5 ばう：見つかりましたー

：

見つかりましたー！

鬼の村から出て、しばらく歩いた頃、私は前方に一人の鬼を見つけました。

夜目とはいえ、あの小山のような黒い固まりは、間違いなく鬼。待ち伏せをしているようです。

いつ私が村を出たとばれたのでしょうか。早くも命の危険です。

私たちは、鬼の村に来てから、軟禁状態でした。

鬼の村の周辺をうろちよろする位なら、鬼たちは寛容でありましたが、反物を売りに行く時など、村を出る時は、必ず数人の鬼をつけていました。

ちなみに、この道は反物を売る時に、何度か通った事があります。鬼も通り慣れた道のように、道幅は広く、見通しもままよいです。鬼は夜目が利くので、既に私は、あの鬼に見つかっていることでしょう。今さら身を隠す事も出来ません。

夜に旅装でこっそりと、なんて言い訳の余地もございません。

私たちと鬼には、目に見えない約束事がありました。

私たちは、（表面上は）無闇に鬼に逆らう事はせず、鬼は、（表面上は）娘たちに対していたずらに危害を加えません。

村からの脱走は、この暗黙の約束、ある種の信頼関係を、壊す行為なのです。

私の村での暮らしと言えば、決して悪い待遇ではなく、完全に約束を破った私に非があります。

たしかに、このような脱走の失敗も予想していましたが、生死のかかる罰を受ける覚悟もございますが、闇夜に鬼とか、やはり怖いものは怖いのです。

「村を出るのか。」

「……っ。」

鬼からの問いに、私はつい身構えて、木の陰に隠れました。

「……。」

「……。」

フクロウと虫の音が響きます。むしろ、あと少しで私が虫の息です。

「……。」

鬼は、私の様子を見ているようでした。

私がここで、鬼に全力で許しを請えば、果たして、鬼に許して貰えるのでしょうか。

鬼は最後の情けで、私が謝ってくるのを、待っているのでしょうか。

今回は謝り倒してごまかし、脱走はまた次の機会にする、という考えもあります。

しかし、そうはできませんでした。

命のかかる罰を受けても、村を出る、とばかり考えていたのです。
というか正直、そんなに頭が回りませんでした。

「…ど。どなたか存じませんが……どうか、お見逃し下さい。私は、
村を出たいのです。」

私は懇切丁寧に言います。鬼は、

「嘘だろう。」

「……嘘ではございません。どうか。ひ」

鬼は一步前に出ました。私は一步後ろに下がります。まあ今でも
十分、間合いは開いてるのですが。鬼は月明かりに目が光って、怖
いのです。

「吾^{おれ}が誰か分からないと言つのが、嘘ではないのか。」

「……。」

フクロウと虫の音が響きます。

「えっ?」

「えっ。」

私自慢じゃございませんが、この数年で鬼の見分けなど、できた
事ございません。

少女によつては、器用に相手の鬼を見分けますけども。恋つて
すごいですね!

鬼は私に対して、お説教するように懇々^{いそいそ}と言いました。

「見分けなど、ツノの形とか毛色の違いとか、分かり易いのが色々
あるだろうが。」

「その。私の物覚えは、服が変われば、誰か分からなくなるレベルなのです。」

「娘たちの名は、すぐに覚えていたようだが。」

「会話をする頻度が違います。」

「お前が交渉していたのは、いつも毎回全部、吾だったのだぞ。」

「ア…ッ その節は、たいへんお世話になりました……!？」

「……。もういいい。」

森の中で、フクロウと虫が鳴いています。私も泣きたいです。

とりつく島のない鬼に、脱走を見逃してほしい、という交渉の余地などないのでしょうか。

この鬼さんが見逃してくれないとなれば、私も折れません。

となれば行き着く答えは一つ。

私はいずれ来るであろう、鬼からの物理的な鉄槌に、心の準備を致しました。

「……。」

「……。」

しかしいくら待っても、鬼からのこぶしは来ないのです。いや、来ないに越した事はないのですが。

ここで罰がないと言う事は、村に帰ってから処分があるのでしょうか。

「……私を、村へ連れ戻さないのですか？」

私は遠慮がちに、鬼に問います。

それともやはり、ここでぬっころされるの？ 鬼の表情は、やはり私には、うかがい知れませんでした。

鬼は、何やらしばらく間を置いてから口を開きました。

「……。以前、おもしろい話を聞いた。

この世には、不思議な場所、海を越えて、多くの国々があるのだと。」

「……。」

「吾も見てみたいのだ。（嘘だけど）」

「……！」

私は目を見開いて、初めてこの鬼をまともに見ました。

このご時世、他国や外つ国を旅するなどという雲をつかむような話を、私以外にも考える人がいたなんて。しかも鬼で。

私は思わぬ同志に嬉しくなり、身を隠していた木の陰から、少し顔を出します。

「私、」

「おお。」

「私、不死の山というのを見てみたいです。

あと異国ににいるという金の猿とやらも、見てみたいです。ご存

知ですか…。とても楽しそうです。」

「……、木から出てきてはどうだそれらは楽しそうだな。」

楽しそう。無謀とか、突拍子もない、ではなく楽しそうと、私と同じ感想を持つてくれるんですね。

「……！」

あとですね、こうこうコウいう所がございまして、一生に一度は訪れなければ、嘘だという話らしいのです。　どう思われますか？」

「なるほど村へ反物を売りに行く時のように、もう少し近くを歩いても、大丈夫だぞ　それは一目見なければ。」

「……！」

私は、ますます嬉しくなって、興味のあつた場所を鬼に伝えました。

そうして、てくてく歩き続け、気が付けば、すでに森を抜けていたのです。

「…あつ。お名前がまだでしたね。私はリンと申します。」

「……まだと言うか。…いやいい。鹿角だ。」
しかつの

なんとお呼びしましょうか。私は供物の身なので、やはり、様付

けでしょうか。

「鹿角…さま！」

「様はいらぬ。」

逡巡して却下されました。

敬称がいらないうのは、鬼だというのに、たぶん大らかな方なのですね。たぶん。

「では、鹿角…さん！」

「妥協しよう。」

妥協？ まあ妥協を頂いたのでヨシとします。私は道の先を指さしました。

「鹿角さん。あの街道に出るには、こっちの道ですね。」

「そうだな、リン。しかしこっちの方が近道だ。」

「そうなのですか。」

私が鹿角さんを振り返ると、鹿角さんは存外おとなしく立っているのです。

私に危害を加えないと分かれば、恐くない、と言えなくもないかもしれないせん。

私は、これから見る地に思いをさせ、その感動を分かち合えるかもしれない存在に、顔がほころばせました。

私に旅の道連れが出来たのです。

こうして、ある鬼の村から、一人の少女と二人の鬼が、姿を消したのです。

——後日。某書庫。

「お頭。鹿角とリンがいません。」

「ああ、鹿角から事前に聞いている。」

この村の織物を、遠くの町まで営業しに行くのだとか。リンが一緒というならば心強い。」

「……ところでお頭。あいつら下馬評では、まだできてない方に人氣おれがありやす。」

「吾も、そう思う。」

「……。」

「どう見ても。」

「……。」

「……。」

がんばれよ、鹿角……！

一部の鬼達は、妙にうさんくさく爽やかに、空を仰いだのだった。

6 くるじゅ：閑話：鹿角が初めてリンを見た時の話し

鹿角^{しかつ}が初めてリンを見たのは、リンが供物として捧げられるよりも、ちよつと前だった。

鹿角たち数人の鬼が、縄張りの中を見回っていた所、森の中に数人の少女たちがいた。

その中の一人がリンであつた。

少女たちはタヌキに化かされ、キヤーとかヒーとか言っているのである。

その中で、リンは一人静かだったので、鹿角の目を引いた。いるよな、まわりが騒ぐと逆に冷静になる人。自分もどちらかといえ、そつちだ。

少女たちは、タヌキの見せる幻に恐がり、抱き合い騒ぎ、ちよろちよろと動き回る。その様子は、哀れでもあり可愛らしくもあり、タヌキがからかつのも分かる気がする。

ほのぼのとした、牧歌的な光景である。鹿角の主観的に言つと。うむ。今日も縄張りの中は、おおむね平和です。

鹿角がリンを最初に見たのは、これだけであつた。

二回目の遭遇は、うわさ話の中であつた。
いや実際に目にした訳ではないので、回数には入らないか。

鹿角は見回りとも散歩とも言えないで、山深い道を歩いていた。

すると鳥のさえずりと共に、うるちよろしてる小妖怪どもの噂が耳に入る。

「…の村の、リンという娘というのが、…。」
「の養女に…、ほう。」

「…の村長は、人食いの噂があるとか。いつまで生きている事やら…。ひそひそ。」

たしか先日、タヌキに化かされていた少女たちが、あの、からかい甲斐のない少女の事を、リンと呼んでいたような気がする。

そうか、あの娘は人食いにあうのか。…人など、最近食べていないなあ。人食いをたしなむとは、風雅な村長である。

鹿角は遠い日の人肉の味をぼんやりと思い出しながら、見回りとも散歩とも言えない徘徊を続けた。

二回目も、こんな物であつた。

三回目。リンは沼でおぼれていた。

「がぼがぼがぼが」

「…。」

近くに人もいないのか、鹿角は周囲を見回した後、何の気なしにリンを助ける。

たとえ、山に赤子が捨てられていても、蜘蛛の巣に蝶が引っ掛かっていても、基本的には手を出さないが、今回は魔がさした。意味はない。

「がぼがはっ げほっ げほっ」

それにしても人の少女というのは、細くて小さい物である。近頃は作物にも恵まれないのか、骨も浮いている。少女の腕と間違えて枯れ枝をすくいそうになったよ。

ふと見ると、少女の手には薬草が握られていた。多分これを探るために、足を滑らせて沼に落ちたのだろう。

「だれ… げぼげほ あ、ありがつけっほん」

少女は目に水が入り、まだ視界に不自由しているらしい。

鬼の縄張りというだけあって、鬼が人前に出るのは珍しい事ではない。が、まあしかし、鬼の評判は悪かった。

一部の思慮足らずが、いたずらに村人を襲ったり脅したり、暴虐の限りをちよっとしていたのである。

無闇に恐がらせる事もないだろう。

ということで、鹿角はリンの目が回復する前に立ち去ろうとした。

「リンとやら。養子に入った先では、気を付けろ。」

「…な、なぜ私のことを…」

リンはむせた呼吸の中で、鹿角に尋ねた。鹿角は答えずに、リンの濡れた頭をなでた。

小さい頭が柔らかく傾ぐ^{かし}ので、もう一回おまけになでた。

「…水神さま、?…」

察するに、沼でおぼれて、沼で不可解な存在に助けられたから、相手は水神ということか。吾^{われ}は水神じゃないけど、まあいいや。

しばらくあとリンが振り返ったとき、鹿角は既に姿を消していた。

三回目も、こんな物である。

そして四回目。

鹿角がリンを見たのは、捧げられた供物の中であつた。

よく一度目は偶然、二度目はなんとかで、三度目はうんたら、とか聞いた事があるが、回数を重ねても、存在を認知してもらえないのでは無意味である。

鹿角は、すでに何回目か分からないリンとの会話の後、アケビがなにかという話をして、そそくさと立ち去るリンの後ろ姿を見ながら、ぼんやりと思った。

自分の名前がリンに認知されるのは、一体いつのことだ…。

7くさ：やまんば

さて、わたくしは鬼の鹿角しかつのさんと旅は道連れ世は情け。渡る世間は鬼ばかり、アイえ、正式には鬼はない。

前略、鬼の村に残してきたねえさん達、事件です。いま私は逆さまに宙づりにされているわけで、頭に血が上るわけで……

やはり渡る世間は鬼ばかり、なのでしょうか。

私と鹿角さんは今日の昼間、人里離れた山の中に、ぽつんと建っている一軒家を見つけました。

そのとき、日暮れも近かったので、そのお宅に一夜のお宿を求めました。

一人暮らしのおばあさんは人なつっこい笑みを浮かべて、私たちを快く迎え入れて下さったのです。

私たちはおばあさんからお粥を頂いて、代わりに私たちは、お年寄りの一人暮らしでご不便されてる家の手伝いをして、日も暮れて眠りについた頃。

シャー コン シャー コン シャー

耳元で刃物をとぐ音がして、私は目が覚めたのです。

逆さの視界に、足首手首の痛み。

私は手と足を縄で縛られて、天井の梁はりから逆さづりにされていたのです。

私の目に入るのは、囲炉裏と湯をはった大釜と、出刃包丁と砥石といし。あら大変なごちそうの支度ですね。

視界に入るおばあさんは、昼間の面影とはうってかわり、白髪は乱れ、着物から見える腕は土気色。瞳は真っ黄色で血走っています。出刃包丁の手入れに満足がいつて、ニタリと笑った口からは黄色い牙がのぞきます。

おばあさんは山姥やまんばだったのです。

ヒイイ。私は一呼吸置いて、悲鳴を上げようと思いました。

「フカア、」

やだ、変な声になってしまいました。私さるぐつわを噛まされていますね。失敗失敗。なにが。山深い所で一軒家を構える怪しいおばあさんに、お宿を求めた事が。

「おや、目が覚めたのかい。

ヒッヒッヒッ、いいね、怖がらせた方が、肉が美味しくなるんだよ。」

ねるねる的な笑い声を上げるおばあさん。練れば練るほどならぬ、怖がらせるほどって所ですか。

鬼の村にお世話になって、いくせいそう幾星霜。最近はおかげさまで、お肉も付いてきましたよ。

「もうちょつと太らせてからと思ったけどね、久しぶりのごちそうだから、我慢できなくて。フッフ、白い足だね。」

おばあさんは節くれ立った冷たい手で、私のふくらはぎをなでました。

それは食べ頃を見定める手つきですね。家畜か畑の野菜になった気分です。

よく見えませんが、私は逆さの宙づりになっていて、着物のすそがめくれているんですね。はしたない事です。

私も食べるために、生き物を「頂いた」事がある身ですから、これからおこる出来事には想像がつきます。私はやまんばさんの糧かてになるんですね。しかしハイそうですか、とは言えません。できる事なら死にたくはない物です。

私はもがいて梁をミシミシと言わせましたが、やまんばさんを嬉しがらせるだけでした。

「オヤオヤ、生きがいいねえひひひ。」

「……。」

逆に私の足首が痛みました。荒縄から血が出そうです。

さて鹿角さんはこんな時にどこにいるのかというと、こっちのお家に大きな体が入らなかったなので、納屋の方でお休みになっています。

す。

ちよつと離れているので、こちらの騒ぎなど聞こえない事でしょう。

そして明日、私がいなくなったら、やまんばさんが「アア、娘さんなら一足先に出てゆかれましたよ。」とか言っちゃえば、ごまかされちゃいます。

私の人生これまででしょうか。

まだ、渦巻き海峡も三角巨大墓も火ネズミの衣も見えないのに……。

「……。」

シャー コン シャー コン

「……。」

シャー コン シャー コン

——私はカツと目を見開きました。そうです。まだアレもコレもソレもドレも見えてないのに死ねますか。

私は腹筋と柔軟を生かして、やまんばさんが大釜の湯加減を見ているすきに、体を二つに折りたたみます。

ぺたんと腹筋をしているのですね。逆さまにぶら下がって、後ろ手に縛られているので、ちよつと苦しいです。

両ひざを使って、さるぐつわを外そうとします。なかなかうまくいきません。

と言う所で、みしみしいってるこちらを振り向いたやまんばさんと、奇っ怪なポーズをとってる私。目が合ってしまった。

「なにをしているんだい？　あまり暴れると、縄がほどけてしまうじゃないか。ちょっと早いけど、さきに生き血を抜いておこうかね。」

「……………」

やまんばさんは、慣れた手つきで私の頸動脈に出刃包丁をあてがいます。私は命が終わる恐怖に、さすがに震えました。

「ヒエッヒエッヒエッ。」

いいねえ、人間の泣き顔ってのは。我慢できないねえ。少し味見をしようか。」

やまんばさんは黄色い牙によだれを滴らせて、私のどつかをかじろうとします。その牙、痛そうですね。

「我慢がどうしたって。」

その轟音と声は、鹿角さん！

私とやまんばさんは、同時に玄関を振り向きました。

出入り口を壊して、木戸が崩れる音と共に、鹿角さんが無理矢理

やまんばさんのお家に入ってきました。

「山姥、それくらいで我慢とは片腹痛い。」

鹿角さん……。鬼の村では番頭さんだったので、ご苦労されたのですね……。

私は、安心感と恐怖と感慨が入り交じって、涙を一つポロリとこぼしました。

ポロリといえば、私のえり元は大丈夫でしょうか。着崩れしていたらはしたくないです。こんな時にそんなこと気にするのも何ですけど。

鹿角さんは木戸を壊すのに、外にあったナタを片手に持っていて、そのの重さを確かめるように、もう一度振ります。

私の足の長さくらいある立派なナタなのですが、鹿角さんには少し華奢なようです。

どう見ても、やまんばさんが食べそうにない、鬼の鹿角さん。その鹿角さんの乱入に、やまんばさんは獲物を横取られる獣の動きで、臨戦態勢に入りました。

「おやおや。眠り薬入りの粥は効かなかったのかね、おかしいね。」
「おかしいのはお前の納屋だ。」

双頭のムカデやら、大蛇や大クモがいるゲテモノ屋敷で、眠れもせぬわ。しかし人の頭蓋骨のオブジェはよかった。褒めてやろう。」

「気に入ったのなら、一つあげるよ。右から6つめのがオススメだよ。味も良かった。」

なにやら悪趣味な交渉をしながら、鹿角さんとやまんばさんは、じりじりとお互いの距離を測ります。

……納屋に頭蓋骨つて、明らかに今までの犠牲者さんですよ。鹿角さん、それを見て何も思わなかったのですか。本当に飾りだと思ったのですか。

私の疑念をよそに、先に仕掛けたのは、やまんばさんです。研ぎたての出刃包丁を振り上げて、鹿角さんの首に飛びつきます。

鹿角さんのナタと、やまんばさんの出刃包丁の戦いです。

やまんばさんは流石女性。絶妙な包丁さばきです。一方、鹿角さんは力押し。やまんばさんの出刃包丁を強くたたき返します。

やまんばさんは圧倒的に体重ウェイトが足りない。
が、しかし素早い身のこなしで、たたきつけられた壁から、カサカサと体制を整えます。四つんばいで重力に逆らって、ちよつと怖いのです。

その時、懲りずにうごめていた私が、梁から落っこちます。縄がほどけました。肩から板間に落ちるってちよつと痛いのです。

「リン！」

鹿角さんが私をたぐり寄せます。見事に板間を引きずられました。カーリングになった気分です。

鹿角さんはナタで、私の手首足首に縛られた荒縄を切ってくれました。ナタ凄い。一刀両断です。間違えて私の手足も一緒に切断さ

れたら、どうしようかと思いました勢いです。

さるぐつわは自分でほどけますよ。その隙を狙うやまんばさん。壁から跳躍します。さっきから人間の動きではない素早さです。

「ヒヒヒッ。」

「やかましい！」

鹿角さんは、煮えたぎった湯釜をやまんばさんに向かって投げつけます。熱湯を受けるやまんばさん。

蒸気がジュワアアツと音を上げます。やまんばさんは悲鳴を上げながら、焼けた顔を両手で押さえました。

敵に対してとはいえ、何とむごい仕打ち……！

きつと床もあとからお掃除が大変です。鹿角さんはやまんばさんのひるんだ隙に、やまんばさんの出刃包丁を奪い、それで壁に、やまんばさんの腕を縫いつけました。

ツダン ゴリユブシャ

「グアッ。」

鬼。鹿角さん鬼です。鬼ですけど。

私は呆然としながら、血のり的な意味で鮮やかなその光景を、涙目でただ見るだけでした。

鹿角さんは、やまんばさんを壁に固定したあと、やまんばさんの悲鳴を聞き終わらない内に、私を持って、やまんばさんの家から離

脱します。

しかし脱出の間際、私は見たのです。やまんばさんは即座に自分の腕から出刃包丁を引き抜き、私たちを追って来たのを。

「やまんばさんが追ってくまっ。」

私は鹿角さんに不明瞭な報告をします。山道なので足場が悪くて、舌を噛みそうなのです。とりあえずセリフを噛みました。

やまんばさんは四つんばいになり、カサカサカツと人智を超えた早さで山道を走ります。

なんでしょね、人間ありえない早さで、なめらかに自分に迫るモノを見ると恐怖を覚えるのですね。

思わず鹿角さんを掴む手に力がこもります。すみません。絶対に落とさないで下さい！ 運んで頂いてる身ですみませんけどもすみません！

昔話のように三枚のおふだもないのに、私たちは、はたしてやまんばさんから逃げ切れるのでしょうか。

私は後ろ向きに鹿角さんの肩に担がれて、バックミラーのように鹿角さんの後ろを見えています。

やまんばさんも歩き慣れた傾斜のようで、徐々に距離は縮んでいきます。その距離が縮むごとに、私は腕に力を込めます。

すると鹿角さんの走る速さが、ますます落ちていったのです。なぜですか。私が腕に力を込めすぎて、苦しませてしまいましたか。そんなまさか、私の腕力ごときで、いえしかし。

「鹿角さん、やまんばさんがキャアッ。」

やまんばさんが飛びました。

下り坂の勢いを生かして、猿のように飛びかかってきます。

思わず私は、やまんばさんとバッチリ目が合ってしまった。やまんばさんの目は、狩りと痛みで高揚した、人ならざる目でした。見なきゃよかった。怒濤の後悔です。

すんでの所で、やまんばさんを避ける鹿角さん。

やまんばさんの高い跳躍を、逆に、体勢を低くとり避けた形でした。

再び、ジリリと対峙するふたり。

鹿角さんは即座に勝負を付けます。

相手の呼吸について、やまんばさんの長い白髪を、今度は自分のナタで木に縫いつけます。さっきの壁の時よりも深く刻みます。

動きを封じられたやまんばさん。鹿角さんに罵声を浴びせます。どうやら下ネタのようですね。詳しくは解読できませんが。ねえさん方がいたら、むしろもう聞きたくないってくらい説明してくれるのですが……。

鹿角さんは無言でやまんばさんから出刃包丁を奪い、ナタと同様に白髪を巻き込ませて、木に縫いつけます。若干さつきより力が入ってます。

ガッッ

あとから気が付いたのですが、その勢いがあれば、やまんばさんの首をはねてしまえそうです。しかし鹿角さんによると、やまんばさんというのは首を斬っても、動きは止まらないそうです。

うっ、首無しで追ってくるやまんばさんの様子を想像してしまいました。

ともあれ、やまんばさんを足止めして、鹿角さんは私を持って山を下りたのでした。

私は目の前で行われていた、妖怪ファイトの恐怖やら興奮やらが、少しずつ冷めてきました。

てくてくと歩く鹿角さんの、枯れ草のようなたてがみが、後ろに流れていくのをぼーっと眺めます。

そういえば、鹿角さんも血が通っているのですね。肌の色から連想される、鉄のような感触ではなく、思ったよりも暖かなのですね。などとぼっこり思っていると、ほとほと涙が出てきました。

私、無力でしたね。鹿角さんがいなければ、死んでいましたね。

カンフー好きのおねえさんから、ちょっと護身術を教えて貰いましたけど、出会い頭とか痴漢撃退レベルなのです。

武器も心得ていない、女の一人旅というのはこんな物なのですね。情けないものです。

震えも恐怖があとから来ます。嗚咽も出ます。

「た、助けてくれてありがとうございました…。」

私は鹿角さんにお礼を言います。鹿角さんは私の方を気にしな

がら声を掛けます。

「なぜ助けを呼ばなかった。」

少し非難する言い方です。助けをいただいてなんですが、お説教の流れですか。

「……えーと、さるぐつわを嚙んでいて喋れませんでした……。」
「喋れなくても、そこは何かひとつ。」

なぜ鹿角さんが頼み込む形ですか。頼まれてるのか叱られてるのが分からないです。私は落ち武者のようにがっくりとうなだれました。

「……こ、今度から気を付けます。すみませんでした。」

「いつ吾の名を呼ぶか見ていたのだが、」

「えっ？」

「いや助けに入るタイミングを見ていたのだが、」

きつとリンは、一人でもどうにかして逃げ出せていたな。」

「……そんなさすがに一人では……そりゃ生きてる限りは善処しますけども。」

アレいま、見ていたとか、ちょっと人でなしな行動を言われた気がします。気のせいですか。

それに私ひとりでも逃げられたかなんて、疑問です。

さっき首を切られていたら、いつかの終わりでしたよ。人間、死ぬ時なんてあつという間なのです。私はふと、もう会えない人たちの顔を思い出して、淋しくなりました。

早く泣きやまなければ。そう思って顔を上げると、もうすでに私

たちは山の麓まで下りていました。

山の麓には、民家が連なり、店も宿も数件あるようです。

小さな村のようで、明日にはまたすぐに旅装を整えられそうです。しかし今は夜も更け、どの家も雨戸を固く閉ざしていました。

村の出入り口で、鹿角さんは私を降ろして、別行動を提案します。「鬼の縄張りでもない、このような小さな村では警戒されてしまうから。」

「はい。わかりました。——ありがとうございます。お休みなさい。」

私は鹿角さんにお辞儀をすると、鹿角さんは私の頭に、手のひらを乗せました。

私はもう、泣きやんでいますよ。しかし鹿角さんの手のひらは、私の頭蓋骨をすっぽり包むんですね。握りつぶされそうで、ちょっと怖いです。

まあ握りつぶされるといっても、ぐるんぐるんと前後左右に揺らされて、目が回りそうですが。

その時、私は、急に昔の事を思い出したのです。ぐるんぐるん回されたのが、若干の催眠効果でもあったのでしょうか。

数年前、私は沼で溺れたことがあったのです。

そのとき私は確かに、どなたかに助けてもらったのですが、飲んだ水を咳き込んでいる間に、そのかたは姿を消されてしまったのです。

あれはなんだか、タヌキに化かされたような出来事でした。

その助けて頂いたときも、この様なのっしりした手で、私は頭をなでられました。

私は確信めいた心持ちで、鹿角さんに問います。

「鹿角さん。もしかして昔、沼で私を助けて下さいましたか？」

鹿角さんの手がぎよっと固まりました。

顔を上げた私と鹿角さんの目が合います。鹿角さんの目は相変わらず薄い色で、瞳孔は小さくて、感情がよく分かりませんが、その目もよく見ると、独特な趣があるように見えなくもありません。

「私、沼でどなたかに助けて頂いた事があるのですよ。」

「……。」

「その時、そのかたに、私が今度、養女に入る家の事で注意を頂きました。それでなんとなく気を付けていたら、私は生き延びられたのです。」

「……。」

「鹿角さん、どうして目を背けるのですか。」

不自然なまでに体をひねって目をそらす鹿角さん。追う私も、物凄く体をひねります。前衛的なダンスのようです。

たたらを踏む足もとが、じやりじやりと言います。

「あの時、助けてくれたのは水神さまかと思っていたのですが、もしかして鹿角さんだったのですか？」

「そんな昔の事など覚えていない。」

「……………」

鬼というのは、人間よりも長く生きるので、物忘れが激しいのか

もしれません。

「鹿角さん。助けて頂いて、本当にありがとうございました。」

私はもう一度、丁寧にお礼を言いました。ちゃんと鹿角さんの目を見て言えましたよ。

「……。」

鹿角さんはわしわしと私の頭をなでて、私は赤べこのように頭を上下しました。ちょっと脳しんとうを起こしそうです。

そういうふうに関が目を回している内に、気が付いたら鹿角さんは沼の時みたい姿を消していました。

「……。」

鹿角さんって、もしかしたら……。

……ものすごく良い人なのかもしれない。

私は感動にも似た心持ちで、鹿角さんの消えていったらしき林を見つめ、しばらく立ちつくしていました。

あと頭をシャッフルされたので酔っぱらいました。若干吐きそうです。

ちなみに、やまんばさん最寄りのこの村は、深夜にたずねてきた不審な旅人に対して、なかなか雨戸を開けてくれなかったのは蛇足です。

渡る世間は鬼ばかり、アいえ、正式には鬼はない…。

よくわからないのですが、鹿角さんはとてもいい人のようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6414v/>

リンと鬼

2011年11月14日23時50分発行